

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520433

研究課題名（和文）中英語頭韻詩韻律研究—繰り返しの技巧と定型表現としての連語

研究課題名（英文）A Metrical Analysis of Middle English Alliterative Poetry:
Repetitious Mode and Formulaic Word Collocation

研究代表者

守屋 靖代 (MORIYA YASUYO)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：50230165

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英文学、英語史、中英語頭韻詩、口承様式、中世英語

1. 研究計画の概要

平成15年度から今年度平成18年度まで科学研究費補助金を受けた「中英語頭韻詩における口承様式の定型表現」研究において、中英語の韻文や散文に口承様式の定型表現が存在したか、頭韻の繰り返しによる遊びが英詩の伝統が形成されるなかでどのようにして文芸にまで高められていったかを解明を試み、主立った中英語頭韻詩の分析データを蓄積することができた。本研究の目的は、この先行研究で得られたデータを更に多面的に分析し、他の作品も加えて更に総合的なデータとして編集し、定型表現のように繰り返し登場する同一あるいは酷似した連語の成り立ちが、韻律の枠組みの中でどのように機能しているかを解明することである。

分析は、古英語頭韻詩に用いられる口承様式を思わせるように繰り返し登場する一定の語の組み合わせに注目し、それぞれの作品の中で特定の連語が韻律とどのような関係にあるかを解明する。書き言葉を前提とした中英語頭韻詩ではあるが、声に出して読むことが依然前提とされていた当時において、繰り返しを好み、さまざまな技巧を駆使して独自のリズムを生み出した頭韻詩の詩人たちは、斬新的な技巧と古くからの伝統の両方をどのように取り入れたかを解明すれば、中世英語における文芸の意義を再考し、また英語史研究にも貢献することができると思われる。口承様式の定型表現を集め、音韻と統語の関係を明らかにし、個々の作品の特徴、作品間の差と全体に共通するテンプレートを明示

することで13世紀から15世紀のあいだに英語文芸活動が頭韻詩において表現しようとした繰り返し表現の意味と言語変化を再構築することができるであろう。

2. 研究の進捗状況

これまでにデータとして蓄えて来た中英語の分析資料は、半行ごとに音韻と文法構成の情報をインプットして第一段階のデータベースとした。更に種々の古英語辞書、中英語辞書、コンコーダンスなどを用いて頭韻やストレス位置、語順等についてマークし、定型表現が頭韻音、語順、語の組み合わせから検索できるコーパスを作成して来た。中英語頭韻詩において行の後半が韻律を決定する重要な働きを担うという Thomas Cable, Hoyt Duggan, J. P. Oakden らの先行研究に従い、1) 全行、2) 前半行と後半行の間の構成、3) 後半行の構成、4) 後半行の連語、5) 全体の韻律の5点について主立った作品20,000行以上の分析を続けて来た。

このデータベースの作成と校了が今年度前半には終了の予定なので、その後そのデータベースを駆使し、中英語頭韻詩に繰り返し登場する定型表現あるいはそれに似た役割を果たす語句についての著作にまとめる予定である。仮の章がいくつか書き上がったところで出版社との交渉を図る。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

データも予定通り質と量の両方で整備が進んでいる。先行研究の文献を読み進め議論の

基礎となる概念や専門用語について必要な資料と分析方法についてコーパス等の分野から情報が揃いつつある。また、出版に向けて実際の原稿も書き進めており、現在 70 ページほどになっている。

4. 今後の研究の推進方策

今年度は研究休暇で研究に集中することができる。6月までは日本でデータベースの作成と参考文献を読み本のアウトラインを考えることに集中し、7月初めにはイギリスへ出発、来年3月までの滞在を予定している。まず7月リーズで開催される国際中世学会で研究発表をし、その後は University of London, Institute of English Studies の研究員として大英図書館及びロンドン大学図書館にて研究成果の執筆に励む。また授業のある時期には大学院の授業に参加させてもらい、今の英語史研究の動向に触れ、教授達と情報交換を図る。11月にはアメリカに渡り、各地の図書館や学会で更なる資料を入手する予定。英語史研究も IT の恩恵を受け今までになかった研究方法や資料が使われるようになった現状をロンドン大学、大英図書館、アメリカの主要大学図書館で実際に見聞し、来年度からの授業や学生の論文指導に活かしたい。言葉による遊び、芸術の形としての詩、まして頭韻詩のように過剰な音の繰り返しを用いる言葉の芸術は、中世英語だけでなく他の言語、他の時代にも見られる人間の普遍的な現象であり、14世紀の英語の形を知る上で文学、英語学、英語史に役立つ資料として、日本の研究者のみならず欧米の研究者にも役立ててもらえると考える。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

1. Yasuyo Moriya, “Incorporating multilingualism in the development of the English language into English teaching”, *Educational Studies* 52 (2010): 1-18. 査読あり
2. 守屋靖代「通時・共時で見直す英語の変化-そのプロセスと要因」ことばと人間 第7号 (2009): 1-16. 査読あり
3. Yasuyo Moriya, “‘As the Book Says’ and Similar Expressions in Middle English Alliterative Verse”, *ICU Language Research Bulletin* 23 (2007): 61-75. 査読あり

[学会発表] (計 6 件)

1. Yasuyo Moriya, “Recurring Collocations in Middle English Alliterative Verse:

Metrical-Syntactic Patterns of the Second Half-Line”, 日本中世英語英文学会, 慶應義塾大学, 2009年12月。

2. Yasuyo Moriya, “The Meter of *The Siege of Jerusalem*: Norms, Deviations, Idiosyncrasy.” The 44th International Congress on Medieval Studies, Western Michigan University, Michigan, USA. May 2009.
3. Yasuyo Moriya, “Incorporating Multilingualism in the Development of the English Language into English Teaching”, AILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée) 2008, Essen, Germany, September 2008.
4. 守屋靖代 “通時・共時で見直す英語の文化・社会” 第34回言語と人間研究会春期セミナー, 国民生活センター, 2008年3月。
5. 守屋靖代 “中英語頭韻詩における“Tags”: Oakdenの7類型の見直しと連語類型による再分析” 英語史研究会, 京都大学, 2007年10月。
6. Yasuyo Moriya, “Tags in Middle English Alliterative Verse: Their Relation to Alliteration and Metre”, The 14th International Medieval Congress, Leeds, UK, July 2007.

[図書] (計 1 件)

1. 守屋靖代 「中英語頭韻詩における繰り返しの技巧と連語」東京、南雲堂出版、2010。305頁。